

道徳授業／誌上チェック&アドバイス

教えて！
加藤先生

筑波大学附属小学校
加藤 宣行



4年

【主題名】
生活をささえてくれている人たち

【教材名】
石油列車、東北へ向かって走れ！
(光文書院)

主題を通して考えたいこと

〈感謝〉

- 自分たちはさまざまなつながりの中で、たくさんの人々に支えられているという事実と向き合い、感謝の気持ちを抱き、その思いにこたえられるような自分でありたいと願う心情を育みたい。



©日本貨物鉄道 (JR貨物)

相談者・相談内容：児童の考えを深める授業



佐倉市立
寺崎小学校
藤田 文子

日ごろから、子どもと板書をつくるようにしていますが、子どもたちの思いがあふれているとき、その時間の軸がどこであったのかが見取りづらくなっていく傾向にあります。今回の場合、感謝の心の広がり子どもたち自身がウェビングで表現し始めていたので見守りました。子ども同士の思いを紡ぎ、思考を深める板書についてアドバイスをお願いします。

本時の展開

学習活動	手立て
○「感謝」の気持ちを伝えたいのは誰かを考え、学習のテーマを設定する。	●自分が「感謝」の気持ちを伝えたい人は誰なのかを共有し合い、教材文と出会う前の自分の思いを明確にする。
○教材文を読み、「感謝」の心がみえるところについて話し合う。	●東北の人たちが「ありがとう」を伝えたいのは誰なのかを考える。 ●お父さんたちが石油列車にのせて、東北の人たちに届けたものは何かを考える。 ●石油列車が走った場所を板書し、その中にみえてくる皆さんの「感謝」の心について話し合う。
○もう一度、「感謝」の気持ちを伝えたいのは誰かを考え、本時の振り返りをする。	●教材文を通して、自分たちはたくさんの人や物などに支えられていることに目を向ける。 ●授業の導入時と終末での、自分自身の考えの変容を確認し、誰に対して、何に対して、どんな気持ちを伝えたいのかを見つめ直す。

本時の板書



授業で工夫した点

① 思考ツールを活用した板書

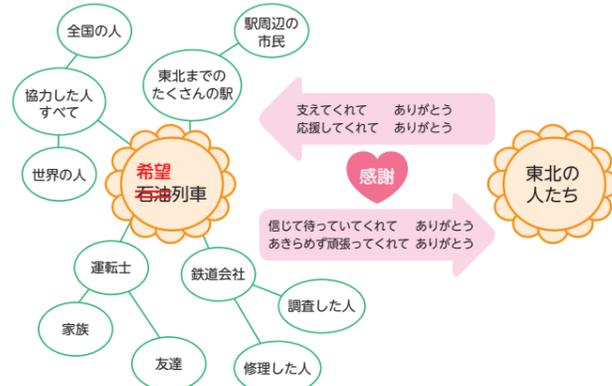
石油列車が走った場所を大きく板書し、その道筋にみえてくる「感謝」の心を子どもたちと一緒に書き加えていった。矢印の色や太さを意図的に変化させることで、人々の思いの深まりやつながりを視覚的にとらえられるようにした。また、ウェビングを活用することで、「感謝の心」の輪が広がっていることにも目を向けられるようにした。

② 子どもから課題意識を引き出す発問の工夫

導入時に「ありがとう」を伝えたい相手について問いかけ、教材文に入ること、子どもたちが考える必然性を感じられるようにした。一つの大きなテーマに向かうような発問をして、考えを話し合い・共有する中で、子どもの言葉を紡ぎながら新たな問いを生み、主体的に学ぶという意識を高められるようにした。

授業の内容 (T:教師 C:児童)

- T: みなさんには、「ありがとう」を伝えたい相手はいますか。
C: お父さん。お母さん。
C: 先生。友だち。
C: ご先祖様??
T: では、今日は、「ありがとう」の気持ちについて考えてみましょう。お話の中に「感謝」の心は、みえるかな。
(教材範読後)
C: 東北の人たちが、お父さんたちに「ありがとう」と思っているよ。
T: 東北の人たちが「感謝」の気持ちを伝えたいのは、石油を運んでくれた人たちですね。
C: いや、違う。それだけじゃないよ。
C: (黒板に書きながら) ここにも駅があつてね。そこで応援してくれている人がいたはずだよ。
C: その間に、こっちの線路を直そうとした人もいたよな。
C: テレビで見たことがあるけど、東日本大震災のとき、世界中の人たちが日本を助けてくれたんでしょ。
T: お父さんたちが東北の人に届けたものは?石油だよな。
C: 石油だけじゃないよ。さっきも言ったけど、たくさんの人々の思いもせていたんだよ。
C: 石油列車だけでなく、歩いて助けに行った人もいるかもしれない。
C: たくさんの人々の思いがクロスして、もういっぱいいっぱいになって、石油列車にのらないぐらいになっているよ。
C: じゃあ、東北の人たちはたくさんの人たちに感謝しているよな。
T: なぜ、たくさんの人たちが東北の人たちのために、それほど頑張れたのかな。
C: お父さんたちや石油列車に関わった人たちは、待っている人がいると思ったから頑張れたはずだし、あきらめないで待ってくれた東北の人たちに「ありがとう」とも思ったんじゃないかな。
C: なるほど、本当だ。(黒板に矢印を書き加えながら)
C: じゃあ、もう、「石油列車」じゃなくて「希望列車」だね。



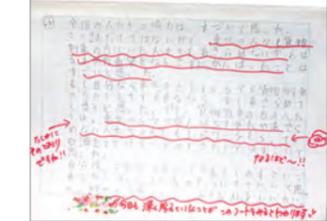
- T: そんなふうには「感謝」の気持ちの広がりがみえると、最初に「ご先祖様」と言った〇〇さんの言葉の意味もわかってきますね。
C: わたしも、「ありがとう」を伝えたい人がたくさんみえてきたよ。
(実際に、石油列車が到着したのを目にした友人の、そのときの思いを伝える。)
T: 「ありがとう」を伝えたい相手を思い浮かべながら、本時のふり返りをノートに書きましょう。

子どもの反応

【A児の振り返り】



「協力」という言葉からイメージを広げ、東北の人たちのために動き出した人々をウェビングで表現している。



振り返りの文章から、自分自身もたくさんの人たちに支えられていることに気づき、感謝の気持ちを伝えていきたいという思いを抱いていることがわかる。

【B児の振り返り】



教材との出会いや友だちとの学び合いを通して、自分なりに考えたことを、図や矢印、文章で表し、思考を整理している。



多面的に考えを深め、「感謝」の心にとどまることなく、たくさんの人たちの「希望」や「努力」の姿に、心が動いていることがうかがえる。

ここはナイス！
子どもとともに
授業をつくる
姿勢



藤田先生が、「子どもたちと板書をつくるようにしている」とおっしゃっている通り、授業展開も、板書レイアウトや構成も大変ダイナミックなものとなっています。これは先生が子どもたちの可能性を信じて、ともに授業をつくっていくことを楽しもうとされているからこそできることだと思います。子どもたちもそのような展開を受けて、自由な視点で発想を広げている様子が伝わってきます。そのような相互の信頼関係が垣間見えるすてきな板書だと思います。

私ならこうする！
「感謝を生む心」
を明らかにする



「感謝」がメインテーマとなる教材での授業実践であるため、藤田先生は「感謝がどこにみえるか」という問いを一貫して発し、子どもたちの気づきを促しています。それはとてもよいことなのですが、さらに深く追究するためには、「感謝を生む心」を明らかにすることこそ大事です。先生も「なぜそこまで頑張ることができたのか」という問いを出されていますが、私だったらここにもっと時間をかけたいと思います。そこから「いてもたってもいられない心」や「相手のために力を出し合う人々がいてくれることのおかげ」などに焦点化でき、それは真っ直ぐ子どもたち自身の生活に響いていくと思うからです。